直言

未来を予測して能動的・迅速に変化 社会と地域の実情を洞察し対応する

患者さんから頼られるのは誇りであり喜び

葉山ハートセンター（神奈川県）院長 飯田 浩司



葉山町と隣接する逗子市を合わせた人口9万の逗葉地区には、急性期病院は他にありません。2000年にハートセンターとして開院した当院には、心臓病以外の診療を求める要望がありました。そこで内科、外科、脳神経外科などの医師とともに総合病院としての機能を付加してきました。救急外来を交代で担当し、救急車の応需数は25年に1,700台を超え、心臓病以外の救急ウォークインも増えました。当院の応需数が増えたことにより、救急搬送時間が短縮されたことが、町の広報誌に紹介されました。

「心臓病センターであるとともに地域に密着した病院でありたい」

7：1基準を満たす看護配置と相まって、今回の診療報酬改定では急性期病院Bの基準を満たし、経営が安定しました。今年度は町と災害時の救護所としての協定を結びました。また地区のメディカルコントロール協議会に参画し、消防署の救急救命士への助言と再教育も行っています。心臓病センターであるとともに、地域に密着した病院でありたいと思っています。

葉山町は「住み続けたい街」ランキング上位の常連です。これは、ここで一生を終えたい街と同義でもあります。その住民に対し何ができるかが課題です。日本救急医学会、日本老年医学会などは合同で、「高齢者救急問題の現状とその対応策についての提言2024」を発表し、高齢者施設での急変対応、看取り、蘇生、搬送に対する考え方、人生会議（ACP）によって本人・家族の意思を確認すること、地域で高齢者を支える方策などを提言しています。

また厚生労働省は高齢者救急という概念を提唱し、本年7月に「新たな地域医療構想策定ガイドライン」を発表しています。40年に向け高齢人口が増加し、高齢者の救急搬送が増え、在宅医療需要が増加します。誤嚥性肺炎、うっ血性心不全、尿路感染、脊椎圧迫骨折、大腿骨頸部骨折など高齢者に特有な病態に対し、受け入れる側の機能として、従来の急性期拠点機能と在宅医療等連携機能、あるいは専門等機能の間に「高齢者救急・地域急性期機能」を提唱しています。高齢の救急患者さんを受け入れ、必要があれば手術を施行し、リハビリテーションを行い、在宅または施設に返す機能を持った病院群です。急性期89床の当院8月の新入院は243人、緊急入院は148人（60.9％）、そのうち118人（79.7％）は65歳以上でした。緊急入院後に手術、カテーテル、内視鏡などの処置を要した患者さんは27例で、大腿骨頸部骨折、慢性硬膜下血腫など高齢者に特有な疾患の手術は8例に行っています。

心臓カテーテル検査・治療が増加 地域包括ケア病棟32床新規開棟へ

当地の二次医療圏では高度急性期と急性期病床は余剰で、回復期病床が必要数の半数しかないことが示されています。来年、当院は地域包括ケア病棟32床を新たに開棟します。葉山町の26年9月の人口は3万1,208人、65歳以上は9,957人です。昨年の救急搬送は1,800人、そのうち1,288人が高齢者でした。高齢人口の12.9％が搬送され、入院が必要とされる中等症、重症は885人、一日当たり2.42人でした。40年には人口が減少しても高齢者は増加し、一日2.79人の高齢者の入院が必要となることが推計され、逗子市からの入院と合わせ、この32床は満床になると予測しています。

昨年は手術室、HCU（高度治療室）の改修が完了しました。本年は田中穣副院長を迎え心臓カテーテル検査、治療が増えています。また特別顧問に浅井徹先生を迎え心臓血管外科手術が充実、心臓病診療もさらに力を注いでいきます。

緊急入院が60％以上、病床回転率は2.7を超え多忙な日々ですが、職員は笑顔で仕事をしています。患者さんに頼られることは医療者の誇りであり喜びです。医師は40代の2人を除き50歳を超えていますが、専門外の診療も協力して行っています。私は救急外来、認知症ケア医、睡眠時無呼吸外来、整形外科手術の助手、HCU当直など、必要なところを補っています。

自然界では偶然の無数の遺伝子変異の中で、環境に適合した変化を獲得した個体が生き残り繁栄すると言われています。我々は未来を予測し能動的に迅速に変化しなければ生き残れません。社会と地域の実情を洞察して対応することが求められます。そうしたなかでも我々の信念は変わりません。“生命だけは平等だ”、皆で頑張りましょう。

徳洲会不整脈部会が第3回会合

症例やグループ推奨品など情報共有

「外科を組み合わせたハイブリッド治療も」

徳洲会不整脈部会は京都市内で第3回会合を開いた。第72回日本不整脈心電学会学術大会の開催に合わせた。ハイブリッド形式で行い、不整脈が専門、または不整脈に関心を寄せる医師やコメディカルが参加。演題発表を行ったり、徳洲会グループ推奨品に関する情報共有を図ったりした。

会の冒頭、部会長の加藤千雄・名古屋徳洲会総合病院院長が挨拶。徳洲会グループでは、各施設で別々に導入・購入しているさまざまな物品を、“グループ推奨品”として、できるだけ統一、共同購入することで、一層のコスト削減を進めている状況を説明した。不整脈領域でも、グループ推奨品の機器を選定したことを報告し、協力を求めた。

加藤部会長の挨拶後、長時間ホルター心電図検査のプレゼンテーションを実施。検査の有用性や今年度の診療報酬改定で評価された内容などを説明した後、グループ推奨品に採用した長時間ホルター心電計を紹介、装置の特徴などを説明した。

会の後半は演題発表を実施。湘南鎌倉総合病院（神奈川県）循環器内科の伊與部隼矩医師、河口達登医師、曽根啓太医師、乙丸友里医師、同院の松永誠吾・臨床工学技士（CE）、鵜野幸恵CE、札幌東徳洲会病院循環器内科の谷友之部長、名古屋病院循環器内科の森武士医師が症例などを発表し、参加者と活発に議論した。



コメディカルも参加し活発に議論

最後に、新田隆・医療法人徳洲会心臓血管外科顧問（羽生総合病院循環器統括顧問）が挨拶。当日学会に出席し、会合に参加していた千葉西総合病院心臓血管外科の中山泰介副部長を紹介し、部会メンバーに加わることを説明。中山副部長が自己紹介した後、新田顧問は出席者に「不整脈治療に、外科を組み合わせたハイブリッド治療のアイデアももってほしいと思います」と呼びかけ、中山副部長とのコラボレーションに期待を寄せた。

後平・札幌もいわ病院院長

睡眠テーマに札幌市長と意見交換

札幌もいわ徳洲会病院の後平泰信院長は8月28日、札幌市の官民対話事業「Meet for the Next2026」に参加、秋元克広・札幌市長と意見交換を行った。

同事業は、より良い街づくりに向け札幌市との連携・協働を望む企業や団体の代表者が、市長と直接、対話するというもの。公募の結果、後平院長は代表者のひとりに選ばれ、「睡眠障害・睡眠不足対策による労働生産性向上とスリープテック（デジタル技術で睡眠の質を測定し、改善を促す手法）の推進」をテーマに提言した。

睡眠不足や睡眠障害は生活習慣病や循環器疾患の要因になったり、労働生産性の低下を招いたりするなど、生活の幅広い領域にかかわり、「医療だけでの解決は難しい」と指摘。そのうえで、スリープテックの実証事業や市民の睡眠実態調査の推進、札幌睡眠健康フォーラムの開催、学校での睡眠教育充実など具体的な対策を挙げるとともに、これらを行政と市内の施設が一体となって進める会議体の設置を求めた。



「官民が協力し地域に睡眠の知見を広めていきたい」と秋本市長と話す後平院長

終了後、後平院長は「睡眠を市民の健康を支える官民共通のテーマにしてほしいと考え、応募しました」と参加動機を説明。「学校での睡眠教育や睡眠を確保しやすい職場づくりなどを進め、『よく眠れるまち・札幌』を地域の皆さんと一緒に育てていきたいです」と意欲的。同院は、日本睡眠学会認定の総合専門医・指導医である後平院長を中心に、今年から睡眠をテーマとする市民公開講座を定期的に開催。6月には北海道内の医療機関で初めて「睡眠障害循環器内科」を標榜するなど、地域の睡眠に対する関心を高める取り組みを行っている。

病気のはなし 237

罹患率は結核の2倍以上

NTM症（非結核性抗酸菌症）

厚生労働省は9月24日からの1週間を「結核・呼吸器感染症予防週間及び非結核性抗酸菌症啓発週間」と位置付け、呼吸器感染症への対策を広く呼びかけた。

2025年の結核の新規登録患者数は9,899人、死亡者数は1,474人に及び、今もって結核は警戒すべき疾患だ。ただ、結核の感染者数は年々減少傾向で、日本は21年に低蔓延国入りを果たしている。

一方、近年、感染者数が急増しているのが、NTM症（非結核性抗酸菌症）だ。全国疫学調査によると人口10万人対罹患率は結核の倍以上となっており、厚労省はじめ各医療機関も警戒を強めている。NTM症は結核菌や、らい菌以外の抗酸菌による感染症の総称で、肺内部に病変をつくることが多く、長引くせきや痰、発熱、呼吸困難などの症状が特徴。悪化すれば死に至ることもある。

NTM自体は土壌など自然環境や家の中（シャワーヘッドの中など水回り）に一般的に生息する菌で、NTMが体内に入っても、必ずしも発症するわけではなく、その人のもつ免疫や体質による。基本的にヒトーヒト感染はしないが、高齢者や基礎疾患のある場合は発症しやすい傾向にあるため、注意が必要だ。厚労省はせきや痰が2週間以上続いたり、微熱や倦怠感が長く続いたりする場合は、医療機関を受診するよう促している。

